

④

古文書三昧

古文書講座講義録シリーズ

vol.4

お銀さまを訪ねて

渡辺崋山旂相日記より

一杉 勝

はじめに

本書は、約十年前から続けている古文書講座の教材として使用した古文書原文と、その解説文、解説をタイトルづつまとめて小冊子にしたものです。

教材の内容は主として江戸時代ですが、一部、戦国時代および明治初期の事柄も含まれます。

原文は図書館、公文書館、博物館、史料館、大学図書館などから入手したものであり、原文掲載個所にその入手先、出典を記載しています。

ページ数を節約するために原文の編集を行い、「A4横」あるいは「A4縦」に収まるように調整しています。このため文字が大きすぎたり、小さすぎたりする事があります。

解説には慎重を期しましたが、第三者による校閲などを経っていません。誤字・脱字、あるいは解説間違いなどもあるかと思いますがご容赦下さい。

ご指摘点がありましたら、巻末の著者メールアドレスにお知らせいただければ幸いです。

もともとこの講義録として作成したのですが、電子書籍の形に編集し直して、公開するにしようとなりました。これから古文書を学ぼうとする方々、更に多くの古文書を読みたいという方々、古文書講座の教材を探している方々のために、少しでも参考になれば望外の喜びです。

著者 一杉 勝。

解説文の凡例

- 一、解説文は、原文をその井井活字で置き換えたもので、漢文の読み下し文にある仮名の点(てい)や、一、二点などは省略しています。
- 二、漢字は原則として常用漢字を用いるが、原文のくずし字が旧字をへびつたものやあやしいなを理解するため、解説文にも適宜旧字を使用しています。
- 三、変体仮名は原則としてひらがなで直した。「𪛗」「𪛘」も原則「え」「い」としたが、一部、原文の雰囲気伝えるため「𪛗」「𪛘」のふたつの事もあつねる。
- 四、助詞の「者」「而」「は」を「ね」「ま」「て」と表記したが、目的格助詞の「江」「上」については現代語の「へ」「上」と表記した。
- また、「哉」「也」「乎」「を」「と」と表記しています。
- 四、「よ」「な」「を」以外のものは表記しています。
- 五、原文に句読点がない(しじやが多い)が、解説文は読みやすく、意味をわねるために、多めに句読点をいれています。



旅の出発 九月二十日

大保辛卯九月廿日拉栴庵
 高木子 におる
 天醫羽雨到 購丹
 竹三 銀十一錢三分又買
 胡椒朱砂 價僅一銖訪
 太白堂主人 長谷川氏 到

大連
 7. 8/24
 内交

青山飯酒 長肆 投二石
 三十 去

道元坂購煙管銅錢七十五
 權卷



旂相日記

天保辛卯九月廿日、拉梧庵

・天保辛卯…天保二年

(一八三二)

高木子之相厚木村、

・梧庵

天翳雨到、購蓑

・高木子

笠、銀十一錢三分、又買

胡粉朱砂、價僅一銖、訪

・胡粉朱砂

・一銖

太白堂主人長谷川氏、到

青山、飯酒肆、投錢二百

・酒肆…酒屋

三十、去

幾ほども あらで帰らん 旅なれど

しばしわかれに 袖しぼりぬる

梧庵

道元坂購煙管、銅錢七十文

(煙管の絵)

原文省略

九月二十日 三宅藩邸発
九月二十一日 荏田宿 発
九月二十二日 鶴間宿 発

青山、道玄坂經由
恩田、長津田經由
大塚、小園經由

荏田宿 升屋 泊
鶴間宿 まんじつ屋泊
厚木宿 万年屋 泊

三日誌

鶴間をさつしびきま 又 衆所多し
田園のりらさし山を 踏込し
おまふりまぬるさう 踏込し
鶴間宿に宿す
尾母澤津之升乃山こゝるら耕る
おまふりまぬるさう 踏込し

一里 築胡多ししちて 築胡乃系
もよふ 法山いありちりし

瀬谷村武川鶴間南より寺あり
妙光寺云々 正甲年中 鑄造なる鐘
る舊恩田村万年寺鐘ナリ
今ハ寺より昔伊賀入道経老ト云
恩田万年寺主下 其鐘多しと
ヲ掛モノニあるニ入道 ヲ取リ鐘多
我香花寺妙光、後スト云
伊賀入道城趾恩田より

野々邑用圃向をさし 走り

廿二日 晴

鶴間を出づ。此邊も又桑柘多し。

桑柘

田圃の間に出れば、雨降山蒼

あふり
そう

雨降(あふり)山

翠手に取るばかり。蜿蜒して一

すい
えんえん

雨降(あふり)山

矚の中に連るものは、箱根・足柄・長

蒼(そう)

尾・丹澤・津久井の山々見ゆる。耕夫

懇に某々と教ふ。

蜿蜒(えんえん)

鶴間原出づ。この原、縦十三里、横

一里、柴胡多し。よって柴胡の原

耕夫

とも呼ぶ。諸山いよいよちかし。

鶴間原

瀬谷村、武州鶴間南にあり。寺あり、

妙光寺云ふ。正中年中鑄造する所の鐘

あり。舊恩田村万年寺の鐘なりしを、

今は此寺にあり。昔伊賀入道経光と云人

恩田万年寺主と暮をあらそひし時、此鐘

を掛ものに出せしに、入道口を取り、鐘を

我香花寺妙光へ移すと云。

伊賀入道城址、恩田にあり。

野を過、田圃の間を平行す。大塚、

早川といふところ近ければ、

早川村の幾右衛門を問。「それは

酒によふたるまぎれ、川に投て死たり」といふ。

」とはあれ、其やからありて、其家今にありや

とよえはしらす。」コノ園といふ所に其娘

行ておれりと聞。「いかに」と問えば、「左に候、それは

清蔵といふ百姓の妻になり、朝夕の

煙細う立ばかりのものにこつ、

御殿様のいたり玉ふ所にはあらず。我

等みへもしらねば、又行て問ひ玉ふ

べし」と云ふ。大塚を越、其幾右衛門と

いふものゝやどりをもとめし、終に柏ヶ谷と

いふ所に出たり。この柏ヶ谷といふは、**雨**

降道にて、いと人もしげく往来せし

ところなれど、戸数わづかに四つ五つ

ならどはなし。たよえは、古寺の

書々たるものなり。ウラ田ウラ影

にせしを引て、背中あぶしうしうへみゆる

翁あねば、又幾右衛門の事を尋ね。

○つたは、ウラなせでまのつた、

此翁ウラのしよき事におもひ、○「ねねば

早川といふは、此細道を入れて村家あり、

又行けば川あり、それが即早川といふ。

そのわたりへ行て、幾右衛門と御尋ね

候得ば、かくれなき酒好きの翁なり。

年は八十にも至りぬらむ。其娘は四

人ありて、二人は江戸におれり。姉にて侍つかひは、

はやくより江戸に出、みやづかへをし、花

をかざりにしき(錦)をば着てかえりしが、

いく程もなく其母なりける人死して、

女ばかりの家なればとて、娘は小蘭村

清蔵といふ方に行、清蔵の弟

なる長右衛門といえるを、幾右衛門が

子にもらひ、二女と其家をつげり。幾右衛門

も清蔵も、いとまじしく世はわたれど、

いとまめだちたる人にて、清蔵の方は

一村はさらなり。他村へもいゆきて、人の

ために、せはしうやをおくるまじ、

家道もいと心のまゝならぬなり。さねども、

清蔵が家は一村の舊家にて、祖

大川鞆負ゆきえといひて、北条の臣にても

ありぬらん。此村の兼古某とらといふ、むかし

やうじゆなきまものまじ、

はやく世をさけて、此村にいたりしを、

大川、此兼古を頼みてしたひ来、

たりは ^{あまの}あまの ^{うら}うら ^{かき}かき ^早早 ^川川 ^村村
 乃 ^上上 ^保保 ^名名 ^出出 ^るる ^とと ^りり ^のの ^寺寺 ^をを ^同同 ^じじ ^のの
 軒 ^下下 ^のの ^板板 ^敷敷 ^をを ^守守 ^成成 ^園園 ^をを ^考考 ^らら ^ちち
 小 ^園園 ^をを ^ささ ^らら ^なな ^らら ^ずず ^とと ^{して}して ^侍侍 ^のの ^菖菖 ^子子
 折 ^のの ^ああ ^らら ^ささ ^しし ^はは ^事事 ^をを ^らら ^ずず ^死死 ^をを ^ささ
 事 ^のの ^始始 ^めめ ^はは ^中中 ^のの ^事事 ^をを ^とと ^らら ^せせ ^てて ^事事 ^をを
 とも ^にに ^おお ^のの ^しし ^てて ^ぬぬ ^れれ ^をを
 都 ^のの ^ああ ^らら ^じじ ^にに ^おお ^のの ^しし ^てて ^ぬぬ ^れれ ^をを

^本本 ^所所 ^のの ^事事 ^がが ^たた ^りり ^のの ^事事
 物 ^のの ^形形 ^はは ^かか ^しし ^にに ^似似 ^てて ^居居 ^るる ^事事 ^はは
 乃 ^もも ^たた ^るる ^事事 ^をを ^知知 ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし
 音 ^をを ^都都 ^にに ^ああ ^らら ^ずず ^ああ ^らら ^ずず ^ああ ^らら ^ずず
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 場 ^にに ^おお ^けけ ^にに ^ああ ^らら ^ずず ^ああ ^らら ^ずず
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて

馬 ^のの ^ああ ^らら ^ずず ^事事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて
 事 ^をを ^たた ^らら ^ぬぬ ^事事 ^はは ^なな ^しし ^てて

共に此村にすめり。やがて早川村

の長泉寺といふ寺を開き、豪農

の聞えありしといふ。紋は軍配團(扇脱カ)なり。よって

小園にては草分にて侍まじなひ「と、懇まじなひ

おしゆるこそ。幾右衛門が死せむもせ、

その娘のゆけむるをまきまきで打き入し、

いと〜喜び、すゝみて細徑をた

どり行。誠によはなれたる片いなかにて、

都の空もおもひ出らわて、何となう

物かなしく、ただ木くさの香ひたかく、冷氣人を

うづ。かくしつゝゆへほごに、鶏犬

の聲遙に聞え、めしたく煙、麦搗

音、都にめしむかなぬにんちつし、

又ゆるじむしうなりたり。唯、先いそ

がわてはこり行。村落よき程に

隔へ、里の障むらびがらあえええ。はこり

ゆ、「幾右衛門家あはこりし、清蔵

が家はこりし」と問えむ、「幾右衛門は

清蔵が家社いん、近けれ」といひら。

「ねむらむその家おこえむ」と、銭へむし

導ゆ。道の傍に地藏堂あり。

これを過へむら、栗のいがけたる障の

いとけいすくするね下らるる数だけ

きつたにんかありあつたに子よ何れよ

よき教の人世が身たつらりつり月をり

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

あつちつちつちつちつちつちつちつちつち

いと驚きたるおもむきにてたゞすめ。の導へ

童が、「これなん清蔵が子に侍る」といふに、

よく顔見れば、鼻のわたりより眉毛の

間にいたり、まがらぶべくもなき吾が

尋る人の弟なり。おもかけ。「家はごいじや」と

問ふに、いらへませで、はじり行。跡よりしき

て、其家に到。大きやかなるおもや

にて、**下屋**、木こや、左り右にならびに、

栗所せまう干ならぶ、犬・鶏ぬ守りし、

かの**武陵**ともいふべし。椽(縁)のほやう

に立てものをとら。かしらに手拭を

いただきて、老さらぼひたる女の、

「ごいねよのじや」と、おそる／＼問ふ。我いん

に思ふやう、児共等は尋る人に似

たれど、此**女社**、姑(こ)にもあるべし。そむせ、

指を屈すねば、二十年あまのむかしの

かたちにてあらんやうもなければ、

顔打まもりとみこし見するに、耳

の下に大きやかなる疣かさあり。これなん、

まぎるるくもなき尋る人なめりしと。わい、

「我童なりし時、御身ごいと隣ごあしからたる者

なり。いさゝか其恩を報んために、厚

手紙の宛先(京都府)に「馬」の字が
見られる。これは「我」の字が
似て書かれたものか。それとも
「子」の字が「馬」の字に似て
書かれたものか。向角の字が
「己」の字に似て書かれたもの
か。あるいは「馬」の字が
「馬」の字に似て書かれたもの
か。同と書かれたものか。

おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が
おとといの馬(馬)の字が

木造いたるを、道途を迂つて、いん造は
尋ねいたれり。我面かげは、だれに
似や、御考候へ」といえは、尚おそれ
におそれ、「左様なる事は我が身に覚え
侍らず、御殿様にはいづ方より到
り玉ふや、もしや人まちがえにてま
あしぬらと」といふ。「左にあらす、御身の
名は何と申さ、とこえは、我名は
町とみへスシ、「おかの名は何と申
ら」といえは、「町」といふ。おめさ
間違ひたらんやと、こつ問申せ
なまやうい、いん造にただがひこが、ごつわ
にいても、ただ病こそ證なるい、「お銀
と申せし事せめりさ」といえは、又ごつ
きたる體に、「いん造に問はせし
時は、左もよびし事あり、「おめさ
君は**麴町**よりや入来り玉ふやと、い
つかはらしたるか鬼に、「おし樂のかけ
入玉え」とはいえは、皆板敷にて貴
なし。花籠持出つ引か、いぢ
坐を設け、かこひなる半式

を取す（捨）しねば、まがうべへもあらぬ
其人なり。ただなみだにむせびて、

たがひに問、答する事もなからず、時

移す。「おつ、我は何や申名に候や、

御覚候か」といふ。「おねば御前には、**上田**

ますみ様にても候や」「おにあらす、これ

は十五、六年もさきに、**よの外**の人に

なりたり、「おすねば渡辺登様にて

候べし。いかがの故にて御尋被下候や、

おつ夢にてもあるべし。けふは

我おつと、さりがたき用ありて、**未**

かえらず、これは二男にて幸藏^{十九}

と申、これは女に^{おつ}、**もつ十一歳**、**栄次郎**

^{八歳、これはおまき}
^{を導きたる童なり} **留吉三歳**、「皆一同にいらなり

拜をなす。やがて**長子清吉^{廿三歳}**

厚木迄馬引していだが、やがて帰らぬし。

いと太く遅しきおのこに^{おつ}、**素朴**

いふばかりなし。やがていふに^{おつ}より路

資出し、皆あたへんとはせしが、いまだ

路のほども遠く、又、は^{おつ}に^{おつ}まで来

ぬるに、厚木より浦賀迄の用也

せで^{おつ}帰んも本意な^{おつ}ければ、**路資**

を^{おつ}たつに割て、六つ割、四分は

と人... 出... 別... 父...
馬... 又... 孫... 一...
... 二... 孫... 孫... 一...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...

... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...

... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...
... 孫... 孫... 孫... 孫...

其にあたえ、式割は其父と

清蔵にあとぶ。又、よろこびかぎりなり。

そばがき二碗食す。梧庵は

碗にて止む。酒三盞さん、かるく飲す。

濁酒のごへ通らず。吸もの・とじひ・

たまご、味よろしからず、一箸給へる。梅

ぼしうまし。栗餅きつ食ふ。

其人よろこびのあまり、何かなと工夫

して、かくはもてなしけるなり。

幾右衛門来年七十八、強壮なる翁なり。

又、行すへ・こし方の物がたりに、なみだ落る事、

折々なり。我が身の上を語りては

なき、都の空を思ひてはなへ、

ただ、けふといふけふ、佛とや云ん、

神とや云ん、かゝる御人の草の庵

に御尋候はとて、むかしがたりに時

移りて、日西にかたぶく。かくあらんも

農業のとまたげせとて、行すえ

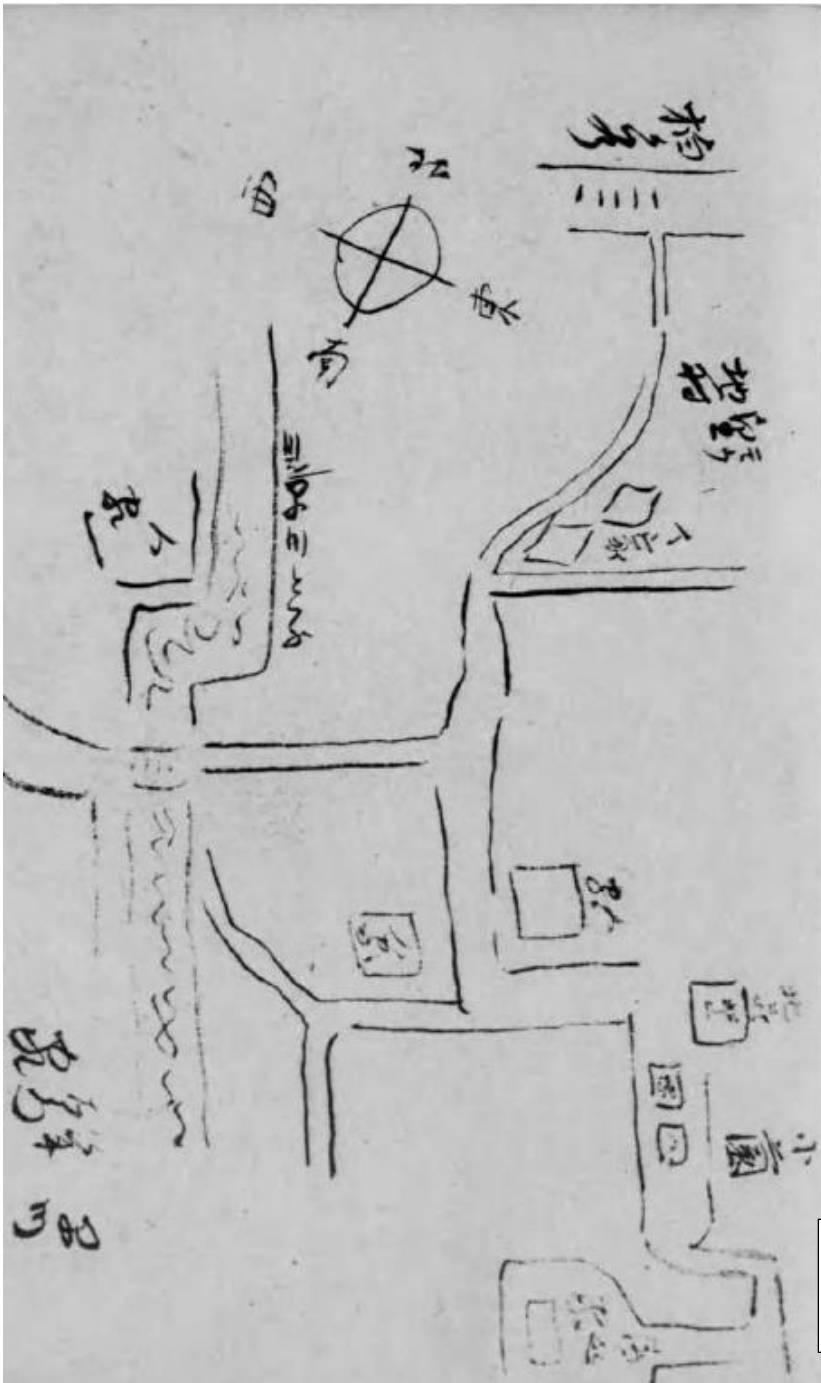
の事なごうけ引ては出じし。長子清

古、馬引き出し、「のりまへ」といふ。断

て、かちより行。頭陀しだと笈おひとを

此の村場は、
 七折の村の、
 皆の、
 其の境を、
 小園、
 二、
 堀、
 妙、
 一、
 寺、
 前、
 光

以下略



助けられ、村堺むらさかいさつかりさつかり皆みな出

ておくる。村の人々もきも打ちつびて、

皆門みなかどに出立いしだてて見送みおくる。又武陵

真境まぎやうを見みることと思おもふ。

そもく此小園こゝろといふ所は、戸

わずかに二、三軒さんけんに不過、高は貳百石、

堀田相模守さむらゐどの領りやうなり。土、赤黒、

砂まじりにて、下石しもいしといふ。田少く圃ぼ多おほく。

早川はやがわも蕭々しやうしやうたる村なり。佐倉さくらち

一年に一度、人別ひとわかあらためあらために來。農はちりせ。

寺社てらじや迄も其寓居いんきよに行いて禮を

なす。又、こゝにて偵察ていさつをなすことを

聞きけり。

(以下略)

